

ポストコロナの新時代 低炭素社会構築のために 最近のインターネット記事より

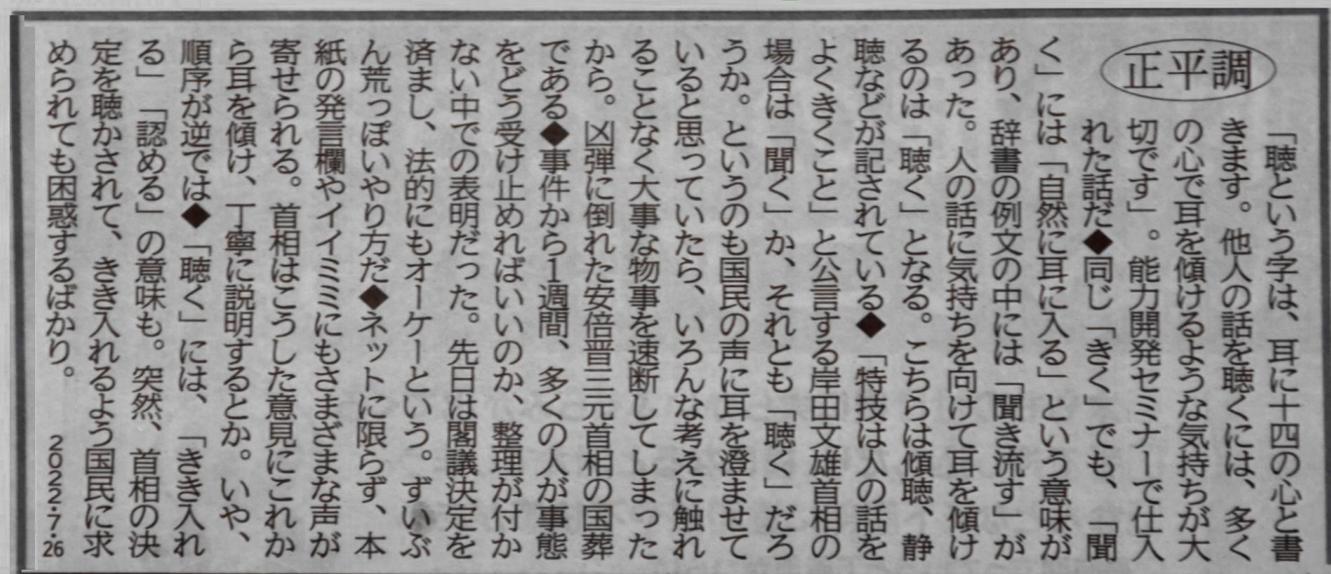
「立場の異なった人たちとつながる」 - 聴くと聞く -

◎ 「聞く」と「聴く」 7月のインターネット・新聞記事より

最近 TV やインターネット等で見聞きする日本のリーダーやコメンテーターたちの言葉・行動のあまりにも軽さ・不可思議なのに危惧を抱いている。 どうも自分の役割・責任範囲をわきまえていないのでは? と感じることも多い。高度成長の時代を経て、高度情報化の時代。 次から次へと過剰な情報が玉石混合で耳にする時代。 それでいて 自分もそんな情報に頼っていると感じることも多い。

7月26日の神戸新聞コラム「正平調」にそんな日本の風潮を危惧するコラムが書かれている。皆様にはどううつるでしょうか……

「聴く」と「聞く」 神戸新聞朝刊 1面コラム「正平調」 2022. 7. 26. より



日本では「五感を研ぎ澄まして……」というが、その五感と中味を一度吟味せねばと思って……。

正平調氏は「聞く」と「聴く」では大違いという。「聞き流す」と「傾聴する」のでは大違い。

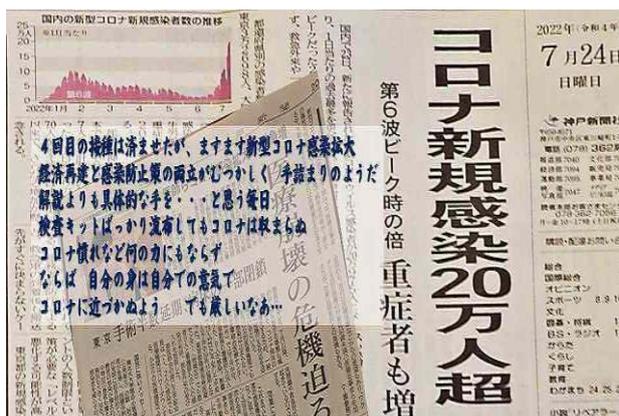
「見る」と「観る・看る・診る」では大違い。若い頃「何を見てたんや」とよく注意されたことを思い出す。言葉にすればおなじであるが、その理解力・行動力そして行動パターンに大きな違いが見えてくる。

でも、今の風潮はほとんど「ことば」で済ましてしまう。

ましてや「どっちやねん」と聞き返すことには抵抗がある。

いまや世界の潮流から取り残され始めた日本 多量の情報に酔うことなく中身をしっかりと「聞き分ける」「見わかる」ための判断力・理解力を研ぎすまさないこと。

激動・変革の時代と言われることも多いのですが、言葉に酔ってはいけないと正平調氏にふむふむと。



【歴史的】アメリカを象徴する会社の
信じられない崩壊
最強だった組織はどこで間違えたのか



多くの日本人は気づいていなかったが、2000年以降のアメリカでこの100年起こってこなかった異変が進行していた。究明王・エリクソンが興した、決して沈むことがなかったアメリカの魂と見える会社の一社、ゼネラル・エレクトリック (GE) がみえるみるその企業価値を失ってしまったのだ。

ただ、鈴木さんはそうではありませんでしたが、一般的に経営者は、社長の期間が長くなるほど「自分が辞めると会社が回らなくなるのではないかと不安にかられ、引退のタイミングを逃すこともあります。20人ほどの会社を26年ほど経営している私もそう思うことがあります。私はもうすぐ65歳です。結果として会社の成長機会を奪うことになることも少なくありません。

成長できない中小企業には
三つの共通点がある

ピーター・ドラッカーは、ある程度まで成長した中小企業の成長の鈍化を理由として、以下の3点を挙げています。

- (1) キャッシュフローより利益を重視する
- (2) マネジメントチームの欠如
- (3) 経営者が自分の位置付けを見失う

「経営者が自分の位置付けを見失う」とは、成長への次のステップに直面した時、自分は次にどういう役割を担うべきだと考えるということ。本来なら引退の決断をすべき機会でも、自分が何かに拘れば、という錯覚にとらわれてしまう。私も経営者の引退の決断は、なかなか難しいので

元大阪大学総長 臨床哲学者 鷺尾清一氏の言葉に思いも新たに

鷺尾清一氏評論 <謙虚な叡智>の書きおこしより

すべてを知ることにはできないが、何も知らないでいることもできない。そんな中途半端場所に置かれているそのことを私たちはここ10年ほどの間に、いやというほど思い知らされてきた。

すべてを知ることにはできないが、何も知らないでいることもできない。そんな中途半端場所に置かれている。そのことを、わたしはここ10年ほどのあいだに、いやというほど思い知らされてきた。

原子力発電の安全性について、気候変動の原因について、感染症への対応について、わたしは専門家とよばれる人たちの意見の相違にため息をつき、じぶんまで調べだしてこんどは迷路に入り込み、徒勞感と不安だけが残り、そんな寒たい思いをため込んできた。

そしてロシアによるウクライナ侵攻。つい先日、4度目のコロナのワクチン接種を受けに近所のクリニックを訪れたら、その日受付をされていた奥さまの傍らにウクライナの歴史の本があった。わたしもまた書きはじめていたのと同じ本である。みなさん同じ苦勞をされているのだなと思つた。

後ろめたさ

わたしの場合、ウクライナ史の勉強はある後ろめたさから始まつた。これまでアフリカや中東で同じような侵攻や内戦が起こつても詳しく調べようとしなかったのに、なぜウクライナの場合は調べようと思つたのかという関心の差、もしくは「偏見」の理由は何かとまずは訝しんだ。

<謙虚な叡智>

汀にて

鷺田清一

希望という名の方向感覚

そのあと、こんどはこの地域の地理と歴史へのおのれの知識の貧弱さが情けなくなつた。

専門のことからでなければ、研究職にある者と一般の市民のあいだに、基本、差はない。しいていえば、前者の探究のほうがかつてに、後者のことくらいだろうか、それとて日頃の癖というか、職業病みたいなものでしかない。ただ、すべてを知り尽くすことのできない問題、たぶん最終的な答えは出ないだろう問題に直面したとき、概して生活上重要な問題ほどその色が濃い。このあたりで引き返すかは人によって異なる。

最近、こんな文章が目がとまつた。
《原理を明白な言葉で語るのには、聞の声を上げるのにも似て、気持ちは高揚するだろう。しかし、そうしなくては気持ちが高揚しないのは心の貧しさか、国内不安定のためであることが少なくない。しつかりした実績を上げており、小さい声であつても妥当なことを述べ続けるのも、長い目で見れば一つの信用につながる。》

政治学者・高坂正堯の遺稿「世紀の国際政治と安全保障の基本問題」(「外交フォーラム」9巻7号、1996年

6月)にあつた文章だ。ある事態を見究めようとして、その複雑さに耐えきれないで、手持ちの図式でさつさと割り切つてしまつ、そういう態度を警めている。

先のウクライナ問題一つとりあけてもそうだが、社会的現実というものは、歴史のコンテキストが複雑に重層していて、わずかな視力では捉えられぬものである。そのことを体得しようと、高坂の著書の一つ、「国際政治 恐怖と希望」(1996年初版、2017年改訂)にも手を伸ばした。そして、透視力のある人というのはこういう考え方をするものかと、あらためて感じ入つた。

戦争というものがなくならないその理由について、政治的な力関係と、国境を跨ぐ経済交流(というより格差)と、地域それぞれ価値体系という三つの視点から重層的に論じつつ、軍備縮小と平和維持の絶望的な難しさ、その困難の認識の上に立つた「謙虚な叡智」の必要を説いている。

すぐに楽観せずにとめて懐疑的であること、一つの視点で性急に結論を引きたさなことを、問題ごとに強調している。

一例だけあげると、たとえば「言論の自由」についてこう述べる。

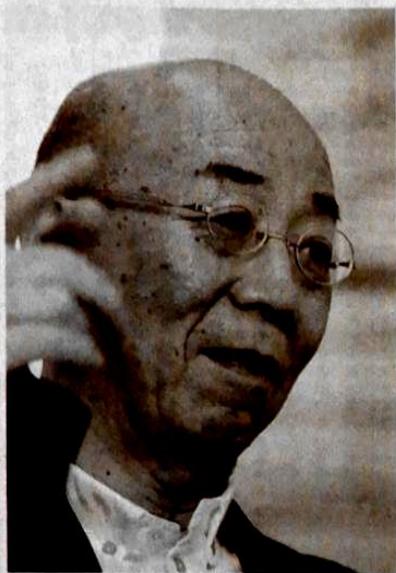
《言論の自由が認められていることは、政府の行動を監視し、制約するための必要條件であるけれども、言論の自由があれば必ず政府が制約さ

れているわけではない。言論の自由は、人びとの同調性が強い現代の巨大社会では政府の行動に対する支持を生み出し、政府の力を強めるという面もある。》

息継ぎのために顔を上げず、どこまで潜水できるか。つまり問題が複雑すぎてすぐに強手が出なくても、どこまで事態のその複雑性に耐えられるかという、そうした知性の耐性を、この本は体現している。そのとき重要なのは、つねに懐疑的であることであるが、さらにそれ以上に重要なこととして、高坂は「希望」という名の方向感覚を培つておくことをあげている。半世紀以上前の本だが、茫然と立ち尽くすわたしたちの背中をそつと押してくれたような気がする。

懐疑的であれ

この本で高坂は、世界から



わした・きよかず 1949年京都市生まれ。京都大大学院博士課程修了。元大阪大学総長、前京都市立芸術大学長。せんだいメディアテーク館長。専門は臨床哲学。「モードの迷宮」(サントリー学芸賞)、「『聴く』こと力」(桑原武夫学芸賞)など著書多数。

参 考 From Kobe8月 ひまわりの夏 2022 神戸便りより

インターネットで見つけた巨大企業トヨタの記事に最近の世相を重ねて

要 旨 自動車メーカーの「下請けイジメ」の記事に思う

サプライヤーの「ケイレツ格差」もう随分長いなあ…と By Mutsu Nakanishi From Kobe

全文 <https://infokkna2.com/ironroad2/2022htm/2022mutsu/fkobeR0408A.pdf>

紹介記事 1. ダイヤモンド on line 2022. 7. 10.

自動車メーカーの「下請けイジメ」を示す衝撃データ大公開！搾取構造が浮き彫りに

ダイヤモンド編集部 浅島亮子：副編集長

自動車産業は裾野が広く、完成車メーカーを頂点とするサプライヤーピラミッドを形成している。

近年、完成車メーカーやティア1（1次下請け）などピラミッドの上位企業が好決算を挙げる中、それ以外の中下位サプライヤーが潤わないケイレツ格差が問題視されるようになってきた。

実際に大企業による下請けイジメは存在するのか。特集『決算書 100本ノック！2022夏』（全21回）の最終回では、大企業による搾取構造を示す衝撃データを明らかにする。（ダイヤモンド編集部副編集長 浅島亮子）

■ 特集『決算書 100本ノック！2022夏』（全21回） https://diamond.jp/list/feature/p-fs100_2022summer

紹介記事 2

THE OWNER 編集部 「下請けいじめと呼ぶかは自由だが…」

■ 「下請けいじめ」の成果？コロナ禍でもトヨタ 2兆円超えの黒字

<https://the-owner.jp/archives/5624>

■ 「下請けいじめと呼ぶかは自由だが…」との上記紹介記事の論調そのものが、大企業・経済団体・官僚などが考える中央の考えか？あの例の「トリクルダウン」の考え方そのものと

2022. 7. 15. Mutsu Nakanishi From Kobe

体力のある企業が収益を得て、現状に甘えて、新しい技術開発・先端技術開発を強力に推し進めず、後回しにしたことが現在の日本の現状 出口のない日本衰退の道へと至らしめているのではないか……。

「二番手ではいけないのですか・・・」「トリクルダウン」の考え方に甘んじれば、長期の展望は開けないと。

企業集団の中心にいる大企業と下請け企業とが、ほぼ同じタイムで利益を享受できるのが筋ではないか……と。

自動車事業とは別の企業集団 かつての高度成長時代を支えた鉄鋼集団の雄 日本製鉄がトヨタに出した鋼材価格引き上げがもたらした日本経済全体に対する効果を見るがいい。

国際競争力に名を借った大企業集団の横暴とみるべきではないか……

なぜならこの「下請けいじめ」といわれるトヨタの体質は 本年のみ急に現れたものではないと見えないか？

日本のトップ企業が持つ体質とも見える。

いま 日本をけん引してきた自動車のみならず、鉄鋼・家電産業・エネルギー等々日本を引っ張ってきた産業がほぼ時を同じくして その成長性を失い、先の見通しが取れずで、その中身の実態は承知していないが、少なからず「下請け・中小企業いじめ」と捉える対応がはびこっているとも。

今 日本の先行きのためには「成長」と「配分」と声高に言うだけでなく、しこたま内部留保を高めた企業集団からの「配分」資源 そして新しい成長へ向けた積極投資の道で 社会底辺・インフラ整備を進めないと日本の没落はさらに進むのではないか…。

そんな目でながめると「トヨタ」の存在のなんと大きいことか……。 「トヨタ」への注目が高まるのも致し方なし。

また かつて「トヨタ」と同じ立場にあった「鉄鋼・素材」「エネルギー」「エレクトロニクス」等の産業にも

先行投資の声の大きい「新産業」とともに新しい息吹を吹き込むことが必要だろう。

いまや「成長と集中」の方向を見余らぬよう考えねばならぬポイントにあると思う。

いつもの年寄りのぶつぶつです。暴論あえて 一言

2022. 7. 15. Mutsu Nakanishi